

# 地方小都市旧市街地商店街の空き店舗の利活用について

青木 繁\*

## About the profit inflection of the space store of the local tn. core city soil mall

Shigeru AOKI\*

From an investigation example of Nabari-shi, it became clear about the profit inflection method of the space store of the former city area mall that the expectation of the store manager for inhabitants participation particularly the event that a young person participated in was high.

It is a future research theme to investigate whether you can contribute to the activation of the former city area mall by a way of what kind of participation if you plan what kind of event.

In addition, it became clear to considerably contribute to local activation while art or an artist collaborated with local people through an art event about the profit inflection method of the space store of the former city area mall from a survey by "art Kameyama" example of Kameyama-shi.

The image enhancement as "the town of the art" which created the way of positioning of "art Kameyama" in the (I wait and wake you up) activity made with a town of the whole Kameyama-shi and cooperation, the collaboration, originality of "art Kameyama" will be a future research theme in future.

*Keywords: Local tn., former city area mall, profit inflection of the space store*

### 1. はじめに

地方小都市の旧市街地商店街の空洞化・衰退、空き店舗の増加は全国各地で深刻な問題となっている。

これら商店街は地域の暮らしの広場、地域コミュニティ形成の場としても重要であり、人口減少・少子高齢化時代を迎えた現在、地域生活の拠点更に地域生活文化継承の拠点として何らかの活性化策が必要である。

特に安倍内閣が打ち出した国策「地方創生」のためにも、更に「ダウンサイジング」、「コンパクトシティ」、「サステイナブルシティ」、「中心市街地活性化」、「地域再生」といった、今後の日本の未来を見据えた都市計画・まちづくりのためにも重要な課題である。

本報では三重県名張市及び亀山市を事例に、旧市街地商店街活性化のための、空き店舗の利活用について考察する。

### 2. 名張市の事例

名張市には事例研究として、2011年度より毎年度現地調査に入っている。

名張市は、人口約8万2千人（2013年）、三重県中西部に位置し、近畿圏と中部圏を結ぶ交通の要所また大阪方面通勤者のベッドタウンとして発展してきた。旧市街地商店街は古来から大和と伊勢を結ぶ初瀬街道の宿場町であったため、町屋など古民家もかなり存在し、町家で商店経営をしている事例もある。

名張市においては、施設整備などハード面の環境整備が単発的にいくつか行われているが、計画通りにはいない状況であり、住民参加型のまちづくりなどソフト面もこれからの課題となっている。

また、旧市街地商店街には空き店舗（廃業商店）が多く、2012年時点で空き店舗率が20.7%となっているが、これは全国商店街平均の14.6%（中小企業庁調べ）を上回っている。

空き店舗は旧市街地商店街の縁辺に多く見られ、集客力のある大型店が立地する中心的エリアでは少ない。

\*近畿大学工業高等専門学校

総合システム工学科 都市環境コース

来街者による商店街の町並みへの評価を見ると、高評価の内容は、初瀬街道の町屋などの「歴史的伝統的町並み(古き良き町並み)」、「下町のような人情のある町並み」、「落ち着いた町並み」等である。

旧市街地商店街には空き店舗が多いが、町屋など歴史的伝統的町並みが、来街者により評価されている。

以上を踏まえ、名張市旧市街地商店街の空き店舗の利活用方法等を調べるため、商店経営者を対象に訪問によるヒアリング調査(2013年7月)を行った。更に、市役所、商工会議所、商店経営者を対象に訪問による補足ヒアリング調査(2014年7月)を行った。

## 2. 1 商店経営者の業種別の意向

旧市街地商店街の初瀬街道沿いには、2012年時点で空き店舗が31存在している。これらの空き店舗の利活用の可能性や方法等を調べるため、商店経営者を対象に訪問によるヒアリング調査(自由回答方式)を行った。

調査対象商店は小売業32店舗、飲食店25店舗の計57店舗である。以前に空間現況調査を実施した初瀬街道沿い以外の商店も含まれる。

空き店舗の利活用方法について、商店経営者の業種別の主な回答は以下の通りである。( )内の数字は回答数を示す。

小売業の主な回答

- ・イベントを行って欲しい(6)
- ・学生など若者による出し物、ライブなどを行って欲しい(3)
- ・飲食店を作って欲しい(4)

飲食店の主な回答

- ・イベントを行って欲しい(13)
- ・学生など若者による出し物、ライブなどを行って欲しい(9)

以上のように小売業、飲食店ともに共通の回答は「イベントを行って欲しい」と「学生など若者による出し物、ライブなどを行って欲しい」である。学生など若者が参加するイベントに期待する回答が多く、活性化のひとつのヒントになると考えられる。

小売業では「飲食店を作って欲しい」という回答があったが、飲食店からはそのような回答はなかった。これは飲食店同士の競争を避けたいためと考えられる。

## 2. 2 商店経営者の年齢別の意向

商店経営者の年齢別の主な回答は以下の通りである。

( )内の数字は回答数を示す。

20代～30代の主な回答

- ・若者が集まる店ができて欲しい(4)
- ・イベントを行って欲しい(2)
- ・無料駐車場が欲しい(3)

40代～50代の主な回答

- ・若者が集まる店ができて欲しい(11)
- ・イベントを行って欲しい(7)
- ・何をすればいいかわからない(11)

60代以上の主な回答

- ・若者が集まる店ができて欲しい(4)
- ・イベントを行って欲しい(2)
- ・何をすればいいかわからない(8)

以上のように各年代ともに共通の回答は「若者が集まる店ができて欲しい」と「イベントを行って欲しい」である。

20代～30代の若い世代では、「無料駐車場が欲しい」という回答があったが、これは若い世代は移動に車をよく使うことが反映されているものと考えられる。

40代以上の中高年世代では、「何をすればいいかわからない」と、消極的な回答が目立つ。

## 3. 亀山市の事例

亀山市には事例研究として、2013年度より毎年度現地調査に入っている。

亀山市は、人口約5万人(2013年)、三重県中北部に位置し、やはり近畿圏と中部圏を結ぶ交通の要所として発展してきた。旧市街地商店街は旧国道1号線沿いに存在し、近くには宿場町であった関宿の歴史的伝統的町並みや、大手電機メーカーの工場等が存在する。

亀山市では、数年前から旧市街地商店街(東町商店街)を会場に、全国公募型(コンペ方式)の現代アートイベント「アート亀山」が開催されている。

### 3. 1 全国のアートイベントの動向と亀山市について

近年、アートを活用したまちづくり・地域活性化事業が、日本国内のあちこちで行われており、ひとつのブームの観を呈している。

その場所は大都市から地方小都市・農村まで広範囲であり、事業主体・運営主体も様々である。参加するアーティストも、元々地元に住居する者から外部の者まで多様である。これを契機に来住・定住するアーティストも現れ、地域住民

と交流しながら地域活性化に寄与し、そして観光客をも呼び込むなど成功例も多いようである。

規模が大きく著名なものでは、新潟越後妻有トリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、愛知トリエンナーレなどがある。地方都市特に近畿圏においては、歴史的伝統的街並みを舞台とした近江八幡市の「琵琶湖ビエンナーレ」、地場産業地域を舞台とした「信楽まちなか芸術祭」等がある。

都市計画・まちづくりのコンセプトにアートを取り入れた、宇陀市室生区(旧室生村)の「アートアルカディア計画」や、十和田市の「アーツ・トワダ」などは地方自治体主導型の典型例である。十和田市現代美術館は建築とアート、都市が一体化した施設として話題を呼んでいる。

一般に、地方でのアートイベントには若い人(出品者及び観覧者とも)の参加率が高いと言われている。

地方都市計画や農村計画を専門とする立場からは、これら一連のムーブメントが、小規模でも地域に根付いた、内発型、住民参加型、持続可能型、地域資源活用型、都市農村交流型などいわゆるコミュニティアート型が理想と考える。

既存の旧市街地商店街を舞台とした「アート亀山」は、コミュニティアート型の典型例と言える。

以上を踏まえ、「アート亀山」開催時の亀山市旧市街地商店街の空き店舗の利活用実態等を調べるため、アート亀山主催者を対象に訪問によるヒアリング調査(2013年12月及び2014年10月)を行った。

### 3. 2 アート亀山について

亀山市においては、2014年度より「かめやま文化年(仮称)」を創設している。これは3年に一度を目途に、市を上げて、様々な文化芸術に関する取り組みを集中して開催するもので、亀山市文化体育スポーツ室が主管となっている。

2008年から毎年開催されてきた、公募による現代アートの芸術祭「アート亀山」を、「かめやま文化年」創設の2014年から3年に一度開催の、「亀山トリエンナーレ ART KAMEYAMA 2014」として再スタートを切った。

このアート亀山を主催しているのは「アートによる街づくりを考える会」で、地元商店経営者、地元在住アーティスト、地域住民等により構成されている。会長と事務局長は女性で、他にも女性会員が多く、女性が主導的役割を果たしている。

活動の拠点施設となっているのが、旧市街地商店街(東町商店街)に立地する、亀山市市民協働センター「みらい」である。

地元住民が中心になってスタートした現代アートイベントであるため、運営予算の確保、事務局体制の構築、運営スタッフの確保、参加アーティストの確保、地元自治会の組織的協力の確保、開催時における安全性の確保、古民家等の地域資源の有効活用等、多くの課題がある。しかし

地方小都市における、地元住民が参加・協働するコミュニティアート型イベントの先進例と言え、今後様々なまちづくり活動へと発展することも期待される。

「アート亀山」開催期間(毎年10月下旬から11月上旬頃の約1週間)には、旧市街地商店街(東町商店街)に存在する、現在営業している商店や広場・公園など以外にも、およそ10ある空き店舗も展示・イベント会場等として有効に使用されている。

また、最近では「アート亀山」の知名度も上がり、若手アーティストの登竜門としての認知、位置づけがされてきており、地方小都市における新たな芸術表現の場としても期待が高まっている。

参加した若手アーティストからは、制作費・交通費等の支給もなく自己負担を強いられる中でも、レトロな商店街という新たな場所と作品のマッチングを試みることの意義、また、地元住民との交流から、さらに若手アーティスト同士の交流が得られることへの評価の声が多い。

「亀山トリエンナーレ ART KAMEYAMA 2014」では、コンペで選ばれた若手アーティストが49組、三重県ゆかりのアーティストが13名、そしてボランティアスタッフとして地元住民、大学生、高校生の他、近大高専青木ゼミ卒研究生4名等が参加している。期間は11月2日から9日、会場は今までの東町商店街に加えて西町地区の古民家、亀山市芸術文化協会ともコラボするなど、質的、規模的にも拡大してきている。来場者数は約1万人を数えている。

地元商店経営者の「アート亀山」に対する評価は、「売り上げよりも、とにかく人が来て、商店街を歩いてくれる、賑やかになる、交流が生まれる」などである。個々の商店の売り上げには直結しなくても、街全体が人が集まって活性化することへの評価をしている。

尚、年1回(今後は3年に1回)の「アート亀山」以外にも、東町商店街の空き店舗を利用して、「アートグループmajor 7days ギャラリー」という作品展示会が、毎月第1週の7日間に開催されている。これは女性アーティストたちが主催している。

以上のように、亀山市においては、アートあるいはアーティストが地域活性化にかなり寄与していると言える。

## 4. まとめ

名張市の調査事例から、旧市街地商店街の空き店舗の利活用方法については、住民参加、特に若い人が参加するイベントに対する商店経営者の期待が高いことなどが明らかとなった。

どのような参加の仕方によって、どのようなイベントを企画すれば旧市街地商店街の活性化に寄与できるのかを

探ること等が今後の研究課題である。

本年度はこの課題に向けて、名張市役所、名張商工会議所、名張旧市街地商店街に、青木ゼミ卒業生の活性化素案提示を兼ねた座談会を実施し、研究を継続している。

また、亀山市の「アート亀山」の調査事例から、旧市街地商店街の空き店舗の利活用方法については、アートイベントを通して、アートあるいはアーティストが地元住民と協働しながら、地域活性化にかなり寄与していることが明らかとなった。

今後は、亀山市全体のまちづくり（まちおこし）活動における「アート亀山」の位置づけと連携・協働のあり方、「アート亀山」のオリジナリティを創出した「アートのまち」としてのイメージアップ等が今後の研究課題である。

## 謝辞

現地調査に快くご協力いただいた名張市及び亀山市の市役所、商工会議所、商店街の方々、地域住民の方々等、関係各位に心より感謝いたします。

## 参考文献

- 1) 地方小都市の中心市街地におけるコミュニティハウスに関する研究 その6 中心市街地における非商業的な空き店舗活用の現状と課題  
執筆者：河北 裕喜，浦山 益郎  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2004年8月）
- 2) 新たな担い手を生かした地域の賑わい創出の可能性に関する研究 ー東京都北区十条地区空き店舗活用事例まちなか工房の考察ー  
執筆者：田中 珠里，森永 良丙  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2006年9月）
- 3) 地域資源を活かした中心市街地商店街の活性化について ー倉吉市、境港市の事例を中心としてー  
執筆者：澤田 廉路  
（財）とっとり政策総合研究センターTORC レポート No. 29（2008年）
- 4) 地域資源を活用した中心市街地の活性化 ー秋田県湯沢市を例としてー 執筆者：相澤 康弘  
『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第13巻 第1号（2010年7月）
- 5) 中心市街地活性化基本計画の実施状況と今後の課題 ー中心市街地活性化法に基づくまちづくりー  
執筆者：亀澤 宏徳  
立法と調査（2010年3月）
- 6) アートを活用したまちづくりに関する研究 ー中心市街地活性化の視点からー  
執筆者：青木 繁  
日本高専学会第18回年会講演会講演論文集，pp. 141-142，2012
- 7) 地方小都市商店街の活性化に関する研究 ー名張市旧市街地を事例としてー  
執筆者：青木 繁，西村 友宏  
日本高専学会第19回年会講演会講演論文集，pp. 177-178，2013
- 8) 地方小都市商店街の空き店舗の利活用について  
執筆者：青木 繁  
日本高専学会第20回年会講演会講演論文集，pp. 197-198，2014
- 9) まちなかにおける芸術活動に関する研究 ー場の利用と参加態度を通してー  
執筆者：堀切 梨奈子，佐藤 慎也  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2012年9月）
- 10) 地域づくり活動における地域交流促進を目的としたアートワークショップの効果  
兵庫県播磨町での取り組みを事例に  
執筆者：倉知 徹  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2011年8月）
- 11) 生活観光まちづくりと連動したアートプロジェクトの企画と実践 ー2012年度：大森アート・ヴィレッジプロジェクトを事例としてー  
執筆者：奥田 宗幸，鶴飼 修  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2013年8月）
- 12) コミュニティにおけるワークショップの実践と考察 ー大津市石山商店街における石山アートプロジェクトを事例としてー  
執筆者：林 宏美，佐々木 一泰  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2011年8月）
- 13) 生活の場におけるアート活動と市民参加  
アートプロジェクトにおける市民参加に関する研究 その1 執筆者：内野孝太，堀切梨奈子，佐藤慎也  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2014年9月）
- 14) 東京アートポイント計画を事例とした参加方法類型と参加要因 アートプロジェクトにおける市民参加に関する研究その2 執筆者：堀切梨奈子，佐藤慎也  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2014年9月）
- 15) 個人嗜好を考慮した訪問エリア選択支援システムの提案 ー越後妻有大地の芸術祭における実証実験を事例としてー  
執筆者：鈴木 綾子，伊藤 史子  
日本建築学会大会学術講演梗概集（2011年8月）